



No.4

mi.ra.i.e

つなごう・未来へ

出版に働くものだからこそ、できること

2015年5月10日発行

編集・発行 出版労連（日本出版労働組合連合会）〒113-0033 東京都文京区本郷 4-37-18 いろは本郷ビル 2階

TEL 03-3816-2911 FAX 03-3816-2980 E-mail rouren@syuppan.net URL <http://www.syuppan.net/>

私と「戦争」



譲れない現場感 戦争取材で思うこと

新崎 盛吾（日本マスコミ文化情報労組会議議長）

過激派組織「イスラム国」による日本人殺害事件のニュースに接し、2003年に共同通信の現地取材チームの一員として、イラク戦争を取材したことを思い出した。

近年の戦場取材では、大手メディアが記者の安全を優先して現場から避難させる傾向が強まる反面、フリージャーナリストが最前線で犠牲になるケースが目立っている。04年にイラクで武装勢力に襲撃された橋田信介さんと小川功太郎さん、07年にミャンマーで取材中に撃たれた長井健司さん。12年夏にシリアで山本美香さんが銃撃されたのは、まだ記憶に新しい。いずれもイラク戦争のころに現地でお会いしたり、動静を耳にしたりした方々で、後藤健二さんも当時、中東にいたと聞いている。

私はイラク戦争開戦直後の03年3月下旬、

共同通信が取材拠点としていたヨルダンの首都アンマンに入った。共同通信をはじめとした大手メディアは空爆の恐れがあるとして、地元の通信員を残してバグダッド支局から撤退し、アンマンのほかエジプトのカイロなどでイラクへの再入国のタイミングを図っていた。一方でイラク国内には、戦争に反対する多くの外国人が「人間の盾」として残り、数十人の日本人も含まれていた。社会部記者だった私が現地入りした最大の理由は、国際情勢とは別に日本人の安否を確認し、最悪の事態に備える必要があったからだ。

幸いにして、イラク戦争のさなかに日本人が犠牲になることはなかったが、自らは安全地帯にとどまりながら、イラク国内に残っているフリーの方々に電話取材をしていた後ろめたさは忘れられない。組織に所属して

もフリーであっても、ジャーナリストを名乗るのであれば、少しでも現場に近づきたいと考えるのは当然の感覚だ。

アンマンにいた共同通信の取材陣も「とにかく陥落前にバグダッドに戻りたい」と本社に了解を求めていたが、なかなか認められず、最終的に「バグダッドまでは行かない。連絡が取れなくなったら引き返す」という条件で、記者とカメラマン計5人がイラクとの国境を越えた。結果的に「途中で留まるよりも、物資が充実している取材拠点まで行く方が安全だ」と判断し、バグダッドの「パレスチナホテル」に入ったが、本社は命令違反だとして陥落までの約3日間、バグダッド発の写真や記事の投稿を認めなかった。

その間、パレスチナホテルが米軍戦車に誤射され、外国人ジャーナリストが死亡する事件が起きたが、共同通信が撮影した米軍戦車の映像は配信を取り消され、テレビで放映されることはなかった。米軍がカメラとライフルの照準器を見誤って撃ったとの説があった

ため、責任を問われてはまずいと会社が判断したとの説が有力だが、現場の必死の取材成果を社会に還元せずしてメディアの責任を果たしたといえるのか、と憤りを感じたことを覚えている。

今回の日本人殺害事件以降、危険地帯を取材しようとするジャーナリストを非難する声も聞かれる。国民の知る権利に応えるため、メディアの社会的な役割を果たそうとしてリスクを冒す人々を、安全な場所から冷ややかに見つめる時代の空気が広がりつつある。

シリアへ取材に行こうとした男性の旅券を外務省が返納させるという事件も起きた。官邸の意向を付度した省庁の過剰反応とみられるが、取材・報道の自由への権力の介入は、絶対に認めてはならない。ジャーナリストの犠牲を必要以上に美化するのは危険だが、職務に真摯に向き合う姿勢を尊重する世論が失われてしまっただけでは、犠牲になった人々は浮かばれないだろう。

戦争は秘密から始まる 秘密保護法でこんな記事は読めなくなる

日本新聞労働組合連合（新聞労連）編



新聞労連は、「特定秘密保護法案」が提案されるはるか前から反対の活動を続けていた。何が「秘密」なのかわからない。今でさえ情報開示請求しても出てくるのは黒塗りの情報だ。秘密保護法は、「知る権利」を保障するための取材・報道の自由には配慮義務のみ。出版・報道の取材は「不当な方法」と認められない限り正当とする一とし、政権が思い通りに制限できる内容だ。

本書では、新聞記者たちが今までの経験を通して、今後の取材がどうなっていくのかを探り、悪法に抗い国民の知る権利を守り抜くことを語っている。

おもな内容 新聞記者にとっての秘密保護法／秘密保護法によって、こんな記事は読めなくなる／市民の日常生活にもこんな影響がー秘密保護法施行後の世界

執筆 記者・ジャーナリスト

高田昌幸／斎藤光政／阿部岳／日野行介／磯野直／佐藤大介／坂本信博／宇佐見昭彦／日下部聡／青木理／日比野敏陽

価格 700+税
発行 合同出版
東京都千代田区神田神保町
1-44

TEL 03-3294-3506
FAX 03-3294-3509



教科書の中の戦争

寺川 徹（出版労連教科書対策部部长）

戦争はなぜいけないのか

「あんな悲惨な戦争を繰り返してはいけない」と、戦争体験者の方々には話されます。よほど悲惨な体験をされたのでしょうか。しかし、その体験のない私は「どのくらい悲惨だったのか」「なぜ繰り返してはいけないのか」を、実感をもって理解することができません。わからないことは教科書に書いてあると思い、教科書をめくってみました。

教科書に書かれた戦争

高校で使う日本史の教科書で、アジア太平洋戦争を調べました。3月10日の東京大空襲では死者が約10万人にのぼったこと、広島・長崎に原子爆弾が落とされ多くの人々が亡くなったことなどが書かれていました。これは「被害の歴史」です。

一方「1937年12月、日本軍は国民政府の首都南京を占領し、捕虜ばかりでなく逃走していた敗残兵や民間人を含む中国人10数万人を殺害し、略奪・放火・暴行を行い、南京大虐殺として国際的な非難をあげた」という記述がありました。これは「加害の歴史」です。

さらに、「わきあがる戦争熱」と題して、戦地の兵士を激励する慰問袋や千人針の説明、戦争に協力する学者・文学者・画家などの話がありました。これは「加担の歴史」です。逆に、こうした流れに反対する人びとも書かれていました。これは「抵抗の歴史」です。

戦争を学ぶということ

教科書という紙の上で、文字と写真で「戦争を学ぶ」とはどういうことなのでしょうか。

例えば、東京大空襲では一晩に10万人以上の人々が亡くなったとありますが、10万人とはどのくらい多いのでしょうか。巨人戦で東京ドームがいっぱいになると4万6000人だそうです。この倍以上の人びとが一晩で亡くなったということです。ちょっとピンときま

せんが、逃げまどう人びとや亡くなった多くの人びとの姿を想像するためには、さまざまな資料にあたり、体験者の話を聞くなどして、はじめて被害の実態をリアルに理解することができ、「悲惨な戦争」という言葉の意味に近づけるのだらうと思います。

加害の歴史も同様です。さまざまな資料や文献にあたり、いろいろな立場の人から話を聞くことで、おぼろげながら全体像が見えてきます。日本軍がアジアの国々に対して、どんなことをしてきたのか、なぜそのようなことをしたのか、それを知ることは「戦争を学ぶ」ためには重要なことです。例えば、南京で虐殺を行った部隊は、上海を攻略してから南京に進みますが、その間の食料補給はどうしたのか（軍は現地調達を命じていた）などを知ることで、兵士がどのような精神状態に置かれていたかを知ることができます。普段は優しいお父さんが、お兄さんが、なぜ鬼のような兵士になってしまうのか、このことを理解しなければ、戦争を学んだことにはならないように思います。

加担の歴史や抵抗の歴史を学ぶためには、大きくは世界情勢や経済状況から、焦点を絞れば人びとの日常的生活から、その時代状況を読み取ることが大切です。加担を強いる時代の雰囲気づくりに、教科書は大きな役割を果たしました。現在、道徳の教科化が問題とされるのはこうした経験があるからです。

歴史を修正することなく、真実を学ぶことが大切です。教科書の記述は、戦争を学ぶための入り口に過ぎません。そこから学びを広げていくのです。その際、被害だけでなく加害や加担・抵抗の歴史も併せて学ぶことが、「悲惨な戦争を繰り返してはいけない」という戦争体験者の重い言葉の理解につながるのではないのでしょうか。



真剣に〈平和〉を考えよう

大久保 靖子 (1920 年生まれ 1950 年代に医学書院勤務)

戦後 70 年を経て私の記憶はあいまいになっている。そんな記憶の中から、当事国である日本とドイツの両国で戦争のもたらす辛酸を舐めた我が友〈シュワープ先生〉にまつわる思い出を手繰ってみよう。はじめに当時の我が家族の生活様態に触れておく。

我が家の住居は空襲の恐怖の少ない小都市彦根の近郷で、戦中といえども豊かで、和やかに暮らしていた。非常事態に備えてのバケツリレー・槍術訓練など一切不参加。それでも村八分にされなかったのは、病院勤務の父が、在宅時は気軽に往診を受けていたからである。その感謝の気持ちは、新鮮野菜・米などで返ってくる。そんなふうにより我が家の生き様は戦争傍観者の、言わば〈非国民〉だった。

1941 年 12 月 8 日、戦争勃発と同時に、私は日本女子大学校を繰り上げ卒業になり、翌年彦根に戻った。暇だから英語でも習おうかと、紹介されたのがドイツ人女性シュワープ先生。先生はグアテマラで布教活動をしていただが、帰国のためドイツへの最後の交換船に乗船。日本に寄港した後に本国への出航が不可能になった。幸い彦根高等商業学校(現滋賀大学)の教師の職を得、隣接する官舎に住んでいた。私は習うのをドイツ語に切り替えたのだが、2・3回のレッスンで琴線が触れあい友だちになった。そうなればブロークンで通じ合える。そのうちに私はドイツ人の徹底した緊縮生活を学んだ。食材は余すことなく使う。庭に植えたハーブをお茶にしたり、発酵乳〈ザウアーミルヒ〉を作ったり。先生はこれを我が家でも作ってくれた。

〈三国同盟〉の下で日本とドイツが同様に参戦していた間、先生は安穩に暮らしていた。苦難は 1945 年 5 月 7 日のドイツ軍無条件降伏(同時に三国同盟崩壊)から始まった。先生は即刻職を奪われ、官舎を追われた。同僚の

努力で湖畔に近い 4 畳半の下宿に落ち着いたのも束の間。家主は憲兵の訪問に恐れをなし、先生はまた路頭に。雑魚寝状態の我が家にそう泊めることもできず、「私の住む場所は琵琶湖の真ん中にしかない」と吐露された苦悩の言葉は脳裏に焼き付いている。行動を共にしていた私も憲兵に緩やかながら監視されていた。先生と一緒に京都に行った際に、父の病院に憲兵が聞き込みに来たことで、監視を知った。3 か月後、8 月 15 日の日本敗戦によって先生は自由を取り戻した。

政情が落ち着き始めたころ、先生は念願が叶って帰国。しかし故郷シュワープベンは安らぎの地ではなかった。兄がナチスの党員だったのだ。公的に追放されたのか、周囲の雰囲気によってか、先生は日本に戻る決心をされた。その相談の手紙が父のもとに届き、同僚や教え子の尽力によって、願ってもない先生本来の布教活動の場(京都の教会)が与えられた。こうして先生にとって日本が永住の地になり、私は先生の心の片隅に在りつづけた。

その私に今なお癒えない胸の痛みが残っている。私自身もその頃職を探していて、「東京にアルバイトがあるよ」と聞いて唐突に上京。東京での生活が安定せず、何通かの先生のお手紙に答えられないでいるうちに、ただ〇×で安否を回答すればいい「往復はがき」までいただいてしまった。何年後だったか、病状悪化の連絡を受け、〈最後のお別れを〉と予定していた京都に向かうその日を待たずに、シュワープ先生は帰らぬ人となられた。

以上は戦争にからむ私個人の体験である。戦争のもたらす災禍・苦悩は、世界の人々が誰でもが各人各様にこうむるのだ。今我々は真剣に〈平和〉を考えよう。まず〈和やかな一家庭〉から、そしてお隣同士腕を組んで、〈和の環〉を大きく広げていこう。



二度と騙されないように

水野 秋恵(広島の被爆者、愛知県在住)

私は5歳の夏、爆心地から1.2kmの所で被爆しました。8月6日のあの朝「お菓子を食べておいで」と近所のうちに呼ばれました。負傷した若い兵隊さんが、手に入りづらいお菓子を持ち帰ってきたのです。私と3歳の弟は、大喜びでついていきました。お菓子を食べかけたとき、原爆は落ちました。たくさんのフラッシュを合わせたような光とともに戸がバターンと開き、家が崩れて、私は瓦礫の下敷きになっていました。瓦礫から上をのぞくと、兵隊さんに助けられた弟が、頭や顔から血を出して立っていました。私も瓦礫の下から引きずり出されましたが、顔に数か所と右腕に大けがをしていて、その家のお姉さんが下着を裂いて血止めをしてくれました(それで腕を切断しなくて済んだと、後から聞かされました。私の頬にはガラスの破片が埋まり、舌で触れると破片の感触がありました。晩年になって手術で破片を取り除きましたが、今考えると歯がぼろぼろになったのは、微量の放射線に曝されていたからだと思います)。

山のような瓦礫を這い上がるようにして、母が迎えに来ました。服はボロボロで、髪は天に向かって立っているように見えました。1歳だった末の弟は、祖母の家の瓦礫の下になり、死んでも連れていかねばと、祖母や母が必死に瓦礫を取り除きました。道を通る人は誰も立ち止まって助けてはくれず、まるで幽霊のようにフラフラと行ってしまいました。幸い末の弟も助かって、私たちは避難場所となっていた川の筏の上に逃げました。死んだ人たちがたくさん川を流れていきました。川にも火の粉は降り注ぎ、真っ赤に焼けたトタンが飛んできてはジュウーンと落ちるのが恐怖でした。全身に川の水を被り、神社に逃れました。親戚がリヤカーで探しにきて、五日市の伯母の家に避難しました。農家だったので食べ物に不自由せず、それはその後の健康に影響したと思います。

当時小さかったのでよく覚えていないことも多いのですが、今は亡き祖母や両親から聞いた話が自分の体験に重なっていると思います。

呉の海軍にいた父は私たちを探して入市被爆し、残留放射能の影響だと思いましたが、結核となり1956年46歳で亡くなりました。母は1967年53歳の時に突然死でした。二人とも原爆に殺されたと思っています。

私は長い間「広島にいて運が悪かった」「日本は戦争をしていたのだから仕方がない」と思っていました。若い頃、職場の学習グループで学んで考え方が180度変わりました。原爆投下の意味がわかったのです。

アメリカは原爆投下が戦争を早く終わらせ多くの人の生命を救ったと言いました。しかし当時の日本には食べ物もなく、陸海軍も壊滅状態で、日本が降伏するのは明らかでした。アメリカは政治的・軍事的に有利になるために二つも原爆を落とし、原爆が人体に与える影響の調査研究に、広島・長崎の人々は非人道的にもモルモットにされたのです。

私たち被爆者は、心や体に様々な問題を抱え困難ななか生き抜いてきました。自らの体験を一人でも多くの人に話すことが核廃絶につながると平和運動をしてきました。私は、二度と騙されないようにしっかりと世の中の出来事を考えることが大切だと思っています。けれども国やメディアの言うことを鵜呑みにして判断を誤ったり、結果として騙されていたことを何度も経験してきました。核の平和利用はその最たるものですし、沖縄に行った時にも強く感じました。秘密保護法、集団的自衛権、安保法制などのニュースに、戦前に戻りつつある、騙されないようにと思っています。世界中の膨大な軍事費を別のことに使うなら、人類の抱える問題はほとんど解決できるのではないのでしょうか。



戦争をやめさせるために

杉本 祐一（フリーカメラマン）

2月7日夜7時40分、外務省職員が警察官を連れて私の自宅を訪れ、外務大臣の返納命令書を提示してパスポートの返納を命じた。すでに航空券も手配し、秋に取材していたシリア北部のコバニの難民キャンプで冬の取材をする予定だった。自由シリア軍のガイドも頼み、自分の安全は確保できるはずだった。私はこのような取材を20年続けてきた。それが断たれてしまった。

パスポートを強制的に返納させられたとき、問答無用のネオ・ナチ政治の始まりと感じた。310万人もの国民の命が失われた大戦、敗戦から70年たった日本、沖縄では普天間基地の危険除去を理由に辺野古新基地建設を押しつけ、東日本大震災からの復興や福島第一原発事故の廃炉工程が遅れに遅れているにもかかわらず、被災者に顔を向けず、安倍内閣は安保法制成立に邁進している。

解釈改憲によって集団的自衛権行使を容認し、アメリカとともに世界中に自衛隊を派兵しようとしている。湯川氏・後藤氏殺害事件により、日本はIS（イスラミックステート）に敵視されることとなった。テロリストが日本でテロを起こすことも予想される。

しかし、防衛費を増額して自衛隊の装備を重厚化（なんとオスプレイまで購入）、武器輸出三原則に代えて防衛装備移転三原則を策定し、武器輸出によって死の商人になる決意を示し、特定秘密保護法によって秘密保全しながらアメリカとともに世界中の国と戦える国に変貌することが、日本国民の命と財産を守る方法であろうか。

自民党は改憲草案で、大日本帝国憲法をめざし、国をあげめさせ、国民の権利は公共の福祉ではなく公益および公の秩序によって制限し、自衛隊は国防軍に、権力者だけでなく国民にも憲法擁護義務を課し、緊急事態を宣

言すれば、国会議員の任期に特例を設け衆議院解散もなく政権を継続できること、などを目指している。

戦争で苦難を強いられた日本国民は、二度と戦争はしないと平和憲法のもとに、自由と幸福、民主主義を育て、立憲主義のもと曲がりなりに健全な国家運営が70年続いた。憲法9条のおかげで自衛隊は戦争で1人も殺されず、1人も殺さずにやってきた。それは企業やNPOなどが海外で展開するとき、敵と見なされずに平和裡に活躍することを保障した。

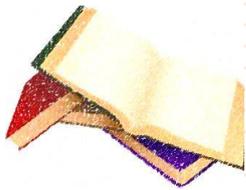
私が20年間戦地に行き、お年寄りや女性・子どもたちの悲惨な様子を発信し続けてきたのは、戦争を止めたい一心からだ。

2012年11月の写真取材では、運転手兼ガイドは元自由シリア軍兵士で武装もしていなかった。自由シリア軍支配地域での取材なので身の危険はさほど感じなかった。しかし13年8月に同じ地域を取材した際には、ガイドもピストルを持ち、ガイドの弟と友人がAKカラシニコフ自動小銃で武装しており、ISが勢力を拡大し自由シリア軍の支配地域に迫っていることを実感した一瞬だった。

難民キャンプで、子どもたちが笑顔で迎えてくれるときがある。戦場に咲いた花のように私には映る。その笑顔に押されて、また戦場に向かう。

今、私たちがなすべきことは、憲法9条を捨て「戦争をする国」となることなく、平和を維持できた9条を活用して積極的に世界中で戦争をやめさせていくことだ。それには、フリージャーナリストだけでなく、大手メディアの報道も欠かせない。

（3月に旅券発給申請、外務省は4月9日イラクとシリアへの渡航を制限する新たな旅券を交付した。これには納得できない）。



『ルポ チェルノブイリ 28年目の子どもたち』

白石^{はじめ} 著 2014年12月 620円+税 岩波ブックレットNo. 917

このルポルタージュは著者が代表を務めるインターネット放送局 Our Planet TV が制作した『チェルノブイリ 28年目の子どもたち——低線量長期被曝の現場から』のいわば“活字版”である。

1986年4月26日のチェルノブイリ原発事故が引き起こした悲惨な被害の28年目の実態を描いた。そうすることによって、東京電力福島第一原発の過酷事故が現に生みだし、将来にわたって背負うであろう残酷な現実を照らし出す鏡としての意義をもった作品となっている。

舞台はチェルノブイリ原発から160キロ離れたウクライナのコロステンや黒海沿岸の保養地オデッサなどである。そこでの子どもの健康被害の実態と、公的機関が

無料で提供する治療や保養について、詳細に描いている。

健康被害とは、甲状腺がんや白血病だけでなく、免疫力と造血機能の減少が、肺や胃、腎臓、肝臓、生殖機能などの障害を引き起こし、風邪をひきやすくなったり、鼻血が出たり、記憶力が低下したり疲れやすいなど様々な症状が子どもたちを苦しめていることも含まれる。

この書は、チェルノブイリを教訓化しないばかりか多額の税金を投入して「不安解消キャンペーン」を張ったり、福島第一原発過酷事故の被害を小さく見せ、原発再稼働と核開発へ突進する許しがたい日本政府の対応も暴露した、怒りに満ちた告発の書でもある。 (小山比路志)

📖 編集後記 📖

その時読んでいたのは、ロジェ・マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』の中の、「1914年夏」の章でした。反戦の意思を誓うために集まった各国の労働者が、直前まで揺るぎない決意を確認しながら、祖国に動員令が下った途端、「おれは戦争が嫌いだ。だが、おれは××人だ」と一変してしまう。彼らはやがて、全く無縁の人々との殺し合いの場へ、自ら進んで身を投じるのです。その箇所まで読み進んで来て、私は思わず本をおいて考え込まざるを得ませんでした。普段は平和を口にする人々まで戦争＝殺人に駆り立ててしまうナショナリズムの不可思議さが、そこには抗し難い現実感をもって描かれていると感じたのです。それだけでなく、戦争体験者の「気がついた時には、もうすでに……」という言葉は、私たち自身がしばしば見聞きするところです。戦争のメカニズムを把握するという課題は、完全には解き得ないものであるように思えてなりません。今また、日本の安全をより強化するとの目的で企てられている大小の出来事が、実は想定外の感情を静かに、そしてひそかに寄せ集め、やがて突然、戦争へのスタンピードが起こる——それは、あり得ないこととして片づけられるものでしょうか。デュ・ガールが「1914年夏」を執筆していた時期は、ヒトラーがドイツを掌握する頃だったそうです。

福島で生きるということ

山内 尚子（教員 福島県岩瀬郡在住）

放射能で汚染された土地にまだ住んでいる。何か立派な決意があってというよりは、収入を得るため「逃げ遅れたまま、我慢しながら生きている」のだ。普通に暮らしているように見えるかもしれないが、多くを失い、あきらめ、以前とは全く違う緊張感の中で生きている。なくしたのは「屈託のなさ」と「のほほんとした安心感」だ。

あの日の朝、出がけに庭のふきのとうを見つけ「帰ったら摘んで食べよう」と、そのほろ苦い味と香りを想った。だが、原発爆発の恐怖と混乱の中でそれどころではなくなったのが、おびただしい喪失とあきらめの始まりだった。庭の梅のシロップや梅干し作りをあきらめ、地べたに落ちた梅の実は「放射性廃棄物」となった。北海道の妹や友人に自慢げに桃やリンゴや米を届けることも、東京の息子に家庭菜園のきゅうりを運んでやることもあきらめた。心待ちだった息子の里帰りも禁止し、息子と一緒に自宅で迎える年越しをあきらめ、これまで4回の冬休みを遠い旅先で過ごした。私にはもう、屈託なく芝生に腰を下ろしたり、布団を外に干したりできないのと同程度に、「明るい未来」を思い描くことができない。

だが、「最後までしぶとく生きてやる」という気持ちは強くなった。なくしたものも多く寿命も縮むのだろうが、そもそもこの国に安全などなかったのかもしれない。朝目覚めると「ああ、今日も生きている」と思う。生きているうちに言いたいことを言い、やりたいことをやり、この世界をほんの少しでも良くしてから死んでいきたいと思っている。

